

1. 2月例会の報告

2月22日東大で、嶋津氏、百瀬氏他の発表が行われた。(参加者: 20名)。今回は供に上流側に高山をもつ河川の段丘地形の話で、その形成過程について種々議論がかわされた。百瀬氏の発表中、合流する本・支流(乳川と親沢)がD p m ~ D k p間で全く異なる河床変遷をもつという点については、懐疑的な意見も出された。

段丘研究は最近でも、基本的には段丘面の連続性およびその堆積物を吟味することによって段丘形成史を編み、ついでにその資料で山地斜面からの岩屑供給を推定するというような論法が多いが、山間河谷の地形発達を論ずるには段丘背後や上流部の斜面(周氷河とも崩壊ともわからない斜面)の直接的な検討が必要となってきた。もはやわからない斜面は手をつけないというような段階ではないように思われる。

発表の後、今年4月からの事務局改組についての提案が現事務局から出された(34ページ参照)。

2. 3月例会のお知らせ

— 3月29日(土) 14:00 ~ —

明治大大学院 (2F) 205教室

- 1) 長谷川裕彦氏(明治大・学): 蒲田川左俣谷の水河地形
- 2) 秋山生哉氏(都立大・学): 多摩川最上流部の谷沿いに分布する巨礫を含む堆積物の編年と堆積機構
- 3) 山川克巳氏(法政大・院): 木曽阿寺川流域における岩塊堆積物

3. 4月例会のお知らせ

極地地形研究グループとの共催で春の日本地理学会時に行います。

— 4月5日(土) 17:30 ~ —

埼玉大(会場は当日掲示いたします。)

- 1) 岩田修二氏(都立大)、神沢公男氏(北大・院): アイスランド北部、ヘルガウル谷の構造土の垂直分帯
- 2) 下川和夫氏(明治大): スバルパール諸島の地形研究
- 3) 平川一臣氏(山梨大): アイスランドにおけるソリフラクション
— 構造と物質移動速度 —

岩成地形談話会2月例会発表要旨 1986.2.22

最上川、五百川峡谷部の地形発達史——支流、上流域
における岩屑生産と関連して—— 島津 弘 (東京大.学)

1. 五百川峡谷部の段丘地形と地形発達

最上川の中、上流に位置する当地域には多数段丘が発達する。これらのうち、1段を除いてすべて侵食段丘である。段丘の分布は、支流の朝日川が合流する峡谷中央を境として著しく異なる。対比に有動なラフな川谷は、この地域において、段丘の横断面段丘と、段丘礫層中の花崗岩礫の混入割合によって対比も行なった。

段丘の形態、段丘堆積物から、地形発達を3つのStageに分けた。I. 分布が悪く、大きな蛇行の跡は見えない。花崗岩礫は少ない。II. 幅の広い河道が形成され、蛇行を生じさせた。この時期の終り頃には2つの大蛇行がcut-offされた。花崗岩礫は多い。III. 下刻が卓越し、河道幅は狭い。花崗岩礫は少ない。現在は、このStageに属する。この地域の地質資料から、I.以下は25000~30000 y.B.P.以後と考えられる。

2. 支流、上流域の岩屑生産と本流の地形発達

最上川への花崗岩礫の供給は朝日山地に由来する朝日川によって行われる。朝日山地では、標高800m以上に、表層形態がなめらかな斜面が分布する。また、河道に沿って山脊が伸びているか、角礫の堆積面が見られる。これらの斜面は、現在固結されている。花崗岩の分布域がほぼ1000~800m以上であることから、現在よりも花崗岩礫の生産された時期が古く、と考えられる。筆者は、この時期が寒冷期であり、本流のII期に対応するものと考えられる。

花崗岩礫の供給される地点の上流、下流、地形の違い、供給量の多寡、この時期での地形の違いから、上流域での岩屑生産が、段丘の形成に大きくかかわっていることか、推定される。この段丘礫種の構成と地形の違いは、峡谷の出口付近で合流する月布川においても見られる。

		上流区間	朝日川	上←	下	三井	区間	→下	上←	月布川	上	→下	
				2	2	3	4	5	6	1	2	3	4
I		19	32,28		10		22	16					
II	a	20	49	57,43	49	56	36,42		41				
	b	21	63	59		56	50	42,47	42			26	25
III	a		32	10	13			27,10	26	16,17,14	10	10	10
	b							21	20		7	13	

表. 投石礫層中に花崗岩礫の占む割合 (1m x 1m の枠をつくり、最大から100コ礫を採取し、その花崗岩礫の個数、上流区間、下流区間は、最上川支流の、朝日川合流点よりの上・下流をあらわす。)

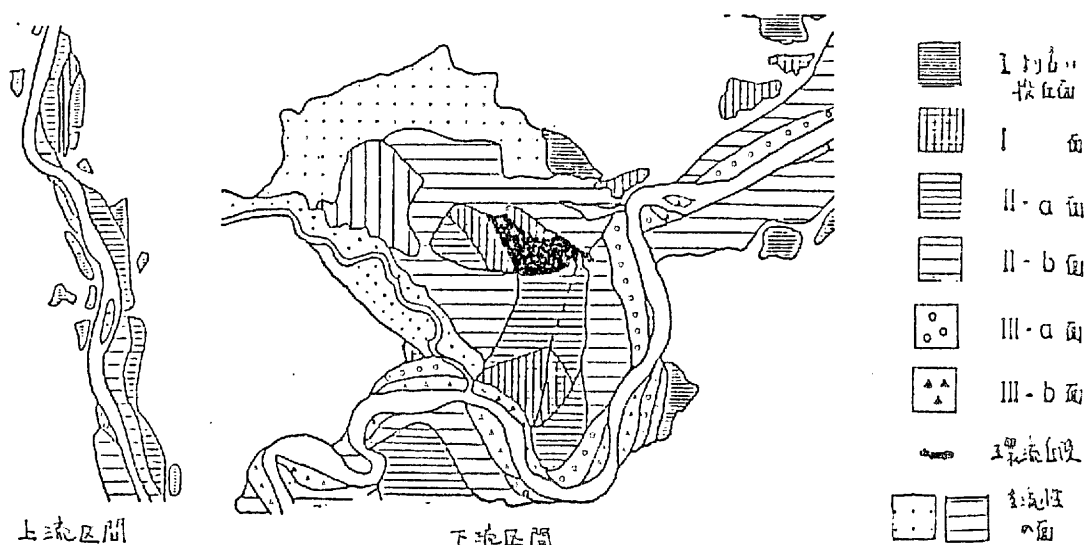


FIG.1 投石分布の上流区間、下流区間での差異

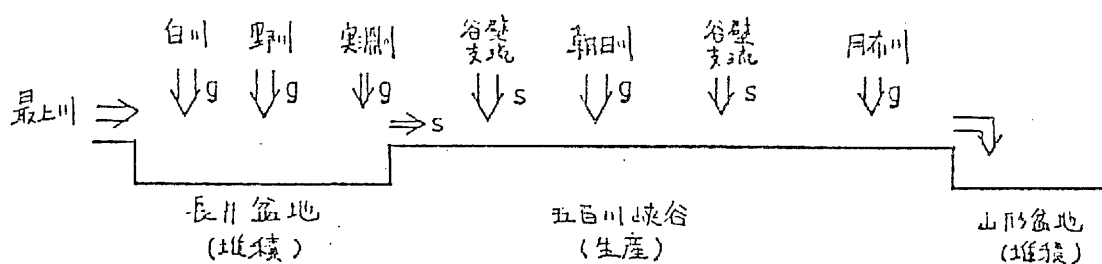


FIG.2 五百川峡谷部周辺における石礫の流れ。(g:花崗岩を多く含む、s:堆積岩を多く含む。)

百瀬 貢・竹本弘幸・水野秀明・平林 潔・小島 弘(駒沢大・院) 朝原尚仁(駒沢大・学)

中部日本における河岸段丘の研究の結果、いくつかの河川の侵蝕・堆積がほぼ同時期にかつ周期的に行われたらしいという見解が出され(町田:1979)、また山岳氷河の前進期と河川の堆積期の同時性が指摘されるようになった(Ono:1980など)。しかし、乳川流域の段丘形成過程を調査したところ、従来の研究であまり例を見ない河床変動が生じていることが明らかとなったので報告する。

乳川流域の河岸段丘を、段丘面高度および被覆するテフラ層から上位より窪平面・マムシ平面・大洞山面・神明原面群・西山面群の5段の段丘面に区分した(図1, 2)。窪平面は、DPm下位の淡褐色風化火山灰層以上のテフラ層に被われる堆積段丘で、構成層の主堆積期は最終間氷期直前の氷期と考えられる。DPm降下期前の10~11万年前に乳川は下刻を始め、その一時的な河床の安定期にマムシ平面を形成した。さらに下刻が進み形成された大洞山面は、DPmの上部ないし最上部のユニット以上のテフラ層に被われる侵蝕段丘である。大洞山面を被うテフラ層中には氾濫原堆積物が挟まれており、乳川谷では約9万~2.5万年前の間は動的平衡状態にあったものと推定される。同じ時期の親沢流域では、堆積作用が卓越し、山地斜面から供給された角礫が河成礫と指交して多量に堆積している(図3)。乳川流域における大洞山面形成以降の本格的な下刻は、AT降下後に始まり、神明原面群や西山面群を段丘化しながら現在まで継続している(図4)。

ここで注目すべき点は、乳川谷において最終氷期に山地斜面からの岩屑の供給が増大したにもかかわらず、谷埋めが生じなかったことである。その原因は、乳川谷は流域面積が小さく山地が急峻であるため、間氷期でも山地斜面からの岩屑供給があまり減少せず、物質供給と掃流のバランスが保たれたので河川は充分に下刻できず、したがって堆積場も生じなかったためと考えられる。しかし、さらに流域面積の小さい親沢では、

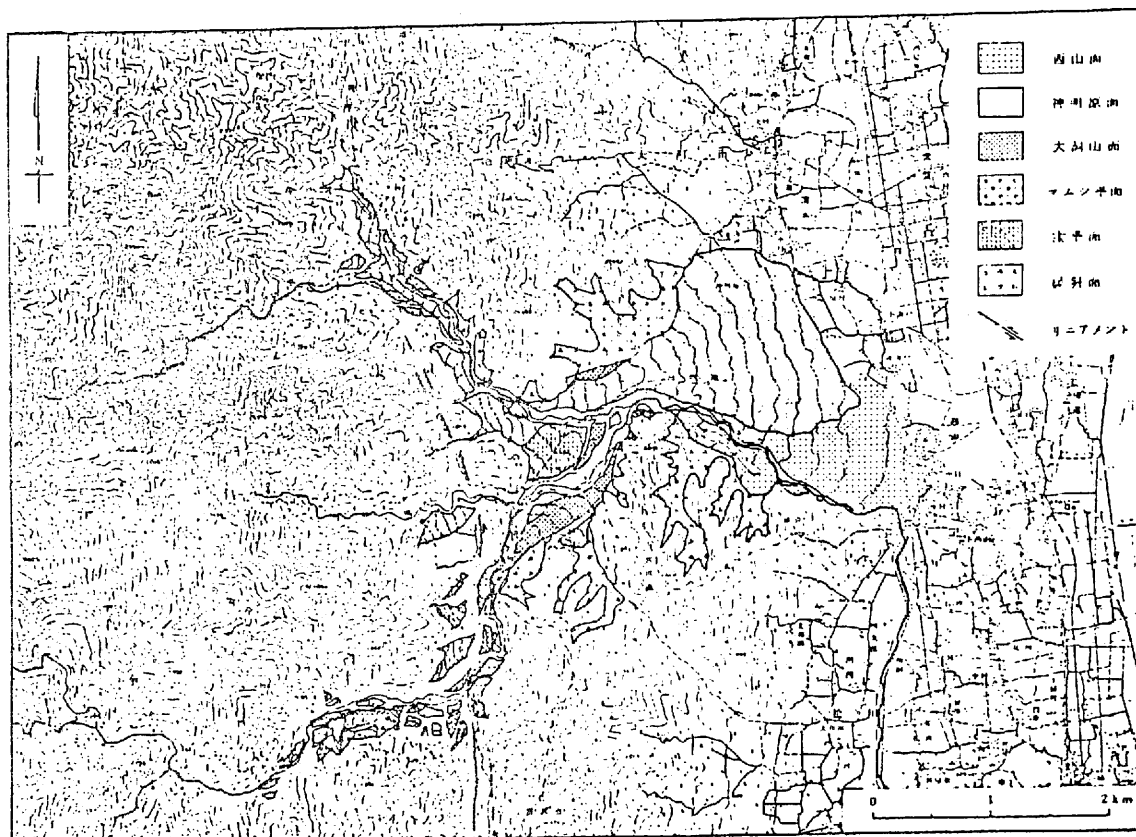


図1 乳川流域の段丘面区分図

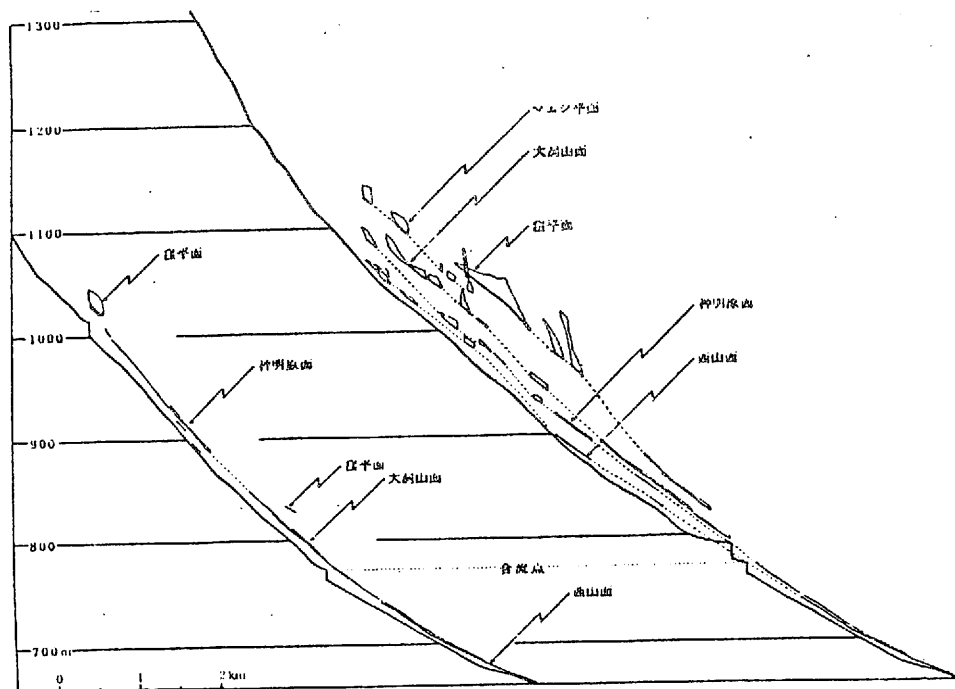


図-2 乳川の河床および周辺地質断面図

最終氷期において支流からの活発な岩屑の押し出しを掃流できず、谷埋めを生じてきた。

以上に述べてきた乳川の変遷は、伊藤・正木（1984）が報告した「岩屑供給期に対応する4回の礫層堆積期によって第2～第5の4段の堆積段丘が形成された」とする地形発達史観と大きく異なっている。

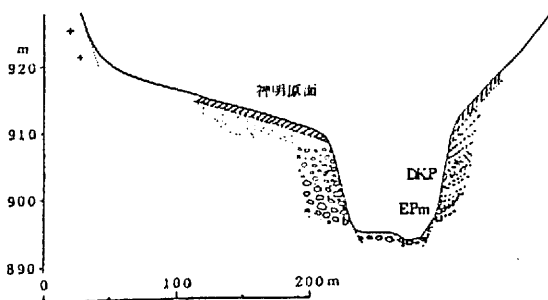


図3 親沢における神明原面の横断面図

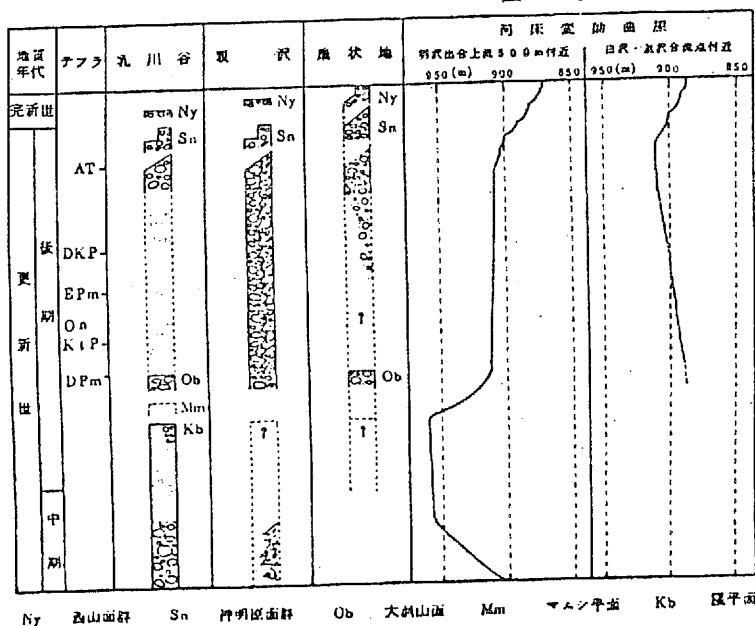


図-4 乳川流域の段丘年図

4. 2月22日に討議された事務局改組の案

1) 事務局の仕事を以下のように分割し、それぞれの委員を決める。

- | |
|--------------------------------|
| a. 通信発送、会計……………東大：高田氏、嶋津氏 |
| b. 例会発表の交渉、世話……………小野氏、小泉氏、岩田氏、 |
| c. 例会会場の世話…………… |
| d. 名簿作成、発送……………明大：松原氏 |
| e. 夏の学校の世話……………(案内者が所属する大学) |

2) このうちaが事務局の中心となり、cを兼ねてもよい。

3) bは大学3～4校に各1名ずつ、計3～4名で構成し、aと常に連絡をとる。

4) dとeは年1度の仕事であるが、それぞれ独立させる。

※ ～は2月22日までに委員を承諾された方。

やや煩雑にはなりますが、以上のような組織にすれば、事務局に多方面からの情報が集まりやすく会の活動が活発化すると考えられます。

以上の点について3月例会でも討議を続けたいと思いますので、御意見おもちよりのほどお願い申し上げます。

5. 関東山地の巡検のお知らせ

5月10～11日に以下のような巡検が行われます。

1986年度定例会(巡検一現地討議)を下記のように開催いたします。

1. 日 時 5月10日(土)～11日(日) (1泊2日)
2. 名 称 1986年度日本地理学会定例会(関東山地巡検)
3. テー マ 多摩川・相模川上流域の山地斜面とその堆積物
山地は 平地への堆積物の供給源として地形学上重要な存在であるが、そうした視点からの山地斜面の研究はごく少なかった。しかし、ここ数年、最終氷期に形成されたと考えられる岩塊斜面の研究が進み、物質供給地としての山地斜面の役割が話題に登るようになってきた。今回の巡検では多摩川と相模川の上流域の山地斜面をとり上げ、堆積物の性質やその供給期、供給のメカニズム、平地地形との関連等について現地討議を行なう。これをステップにして今後の山地斜面研究の発展をはかりたい。
4. コー ス 青梅線河辺駅南(8時30集合)→多摩川上流(斜面堆積物)→柳沢峠(山頂部の岩塊斜面)→勝沼(泊)→真木川流域(斜面堆積物)→道志川流域(段丘・斜面堆積物)→横浜線橋本駅(解散)
5. 案内者 小泉武栄(責任者・東京学芸大)、清水長正(明治大・院)、米澤 宏(独協大付属中・高)、角田清美(小平南高)、渡辺悌二(筑波大・院)、百瀬 貢(駒沢大・院)ほか
6. 募集人員 30名(満員になり次第締切ります)
7. 参加費 1万円
8. 申し込み 4月25日(金)までにハガキで下記へお申し込み下さい。
〒184 東京都小金井市貝井北町4-1-1 東京学芸大学地理学教室 小泉武栄
電話 0423(25)2111 内線 2429
なお全コース車を使いますので、参加希望者はあわせて、車提供の可否もお知らせ下さい。

(土曜理年.59, no.3より)

事務局改組についての提案

85. 12. 21

とまかく現在東海地形談話会は会員数 111 名、大学・研究所への連絡 17 箇所、通信発送のために事務局は忙殺を極めております。このままでは、面倒ばかり多い事務局は、引き受け手が無くなってしまうのではないかと懸念されます。そこで、現事務局としては、来年度と「なにかに事務局をこころよく引き継いで頂くためにも、以下のような事務局改組を提案します。

1) 事務局の仕事を以下のように分割し、それぞれの委員を決める。

① 通信発送・会計 ----- (東大・高田・島津氏)

② 例会発表の交渉・世話 ----- (小野氏・小泉氏
岩田氏・小崎氏)

③ 例会会場の世話 ----- (①と同じに すか・明大)

④ 名簿作成・発送 ----- (明大・松原)

⑤ 夏の学校の世話 ----- (案内者が所属する大学)

2) このうち ① が事務局の中心となり、③ を兼ねてもよい。

3) ② は 大学 3~4 校に各 1 名ずつ、つまり 3~4 名で構成し、① と常に連絡をとる。

4) ④ と ⑤ は 年 1 度の仕事ではあるが、それぞれ独立させる。

※ ~~~ は 2 月 22 日の例会時までにはよく話された方

や、煩雑にはなりますが、このような組織にすれば、事務局に多方面からの情報が伝わりやすく、会の活動が活発化することになるでしょう。

以上 に関する種々の御意見を期待します。

(明治大事務局 : 清水・叶内・沢口)